

博士学位論文要旨集

内容の要旨および審査の結果の要旨

第23集

2020（令和2）年3月

二松学舎大学

はしがき

この冊子は、学位規則(昭和 28 年 4 月 1 日文部省令第 9 号)第 8 条の規程による公表を目的として、2019 (令和 1) 年度に本学において博士の学位を授与した者の、論文内容の要旨及び 論文審査結果の要旨を収録したものである。

目 次

| 学位の種類等 | 学位番号 | 氏 名 | 学 位 論 文 題 目 | 頁 |
|--------|---------|-------|-------------------------------------|---|
| 博士(文学) | 甲第 56 号 | 加畑 聡子 | 江戸時代医学公教育形成期における経穴学の展開—江戸医学館を中心として— | 1 |

博士学位論文審査報告

題 目： 江戸時代医学公教育形成期における経穴学の展開
—江戸医学館を中心として—

氏 名： 加畑 聡子

論文審査委員： 主査 教授 町 泉寿郎
副査 教授 田中 正樹
副査 教授 長島 弘明
副査 国際基督教大学教授 小島 康敬

論文内容の要旨

本論文は、幕府直轄医学校である江戸医学館における鍼灸医学の学問（研究教育）に着目して、「経穴学」（鍼灸医学におけるツボの位置や経脈に関する学知）の研究と教育が、従来の諸学派の所説を継承発展しつつ蘭学など新しい学知の刺激のなかで、どのように形成・発展したのかを、豊富な一次資料の検討を通して、具体的に明らかにしたものである。

本論文の構成は以下の通りである。

目次

序論（末尾に凡例）

前編 医学諸派の台頭と医学教育

第一章 江戸時代医学諸派の台頭

第一節 後世派

第一項 饗場東庵の経穴学

第二項 堀流経穴学の伝承

第二節 古方派

第一項 後藤流の経穴学

第二項 門人への伝承

第三節 漢蘭折衷派

第一項 『灸穴図解』に見る経穴学

第二項 星野良悦の木骨製作

小結

第二章 医学教育における諸問題

第一節 望月三英による学校設立の試み

第一項 学問と書物蒐集

第二項 学校設立の試み

第三項 古方派批判

第二節 津田玄仙による学校設立の試み

第一項 『勸学治体』の刊行

第二項 教育内容

第三項 邪説批判

第四項 学校設立の挫折と請願

小結

後編 江戸医学館設立期における経穴学

第三章 小坂元祐の経穴学

第一節 元祐の出自

第二節 生没年と多紀家への入門

第三節 躋寿館期の教育

第四節 江戸医学館官立化以後

第五節 『愈穴捷径』と『経穴纂要』の比較検討

第一項 『愈穴捷径』の概要

第二項 『経穴纂要』の概要

第三項 著述の目的

一、経穴書に対する問題提起

二、初学者教育

第六節 経穴の考証学的検討

第一項 経穴数の増補

第二項 経穴の順序

第三項 解剖による考証

第七節 『十四経絡発揮広要』について

第一項 著述の背景

第二項 内容の比較

小結

第四章 宮本流経穴学について

第一節 宮本春仙の経穴学

- 第二節 門人への伝承
- 第三節 『経穴示蒙』に見える書き入れについて
- 第四節 小坂元祐の経穴学との比較
- 小結
- 第五章 山崎宗運の経歴
 - 第一節 宗運の業績
 - 第二節 多紀元簡との親交
 - 小結
- 第六章 『釈骨』翻刻と「骨度折量法尺式」製作について
 - 第一節 『釈骨』版刻の背景
 - 第二節 「骨度折量法尺式」製作の背景
 - 第三節 「骨度折量法尺式」付属「量尺」「法尺」の使用法
 - 第一項 基本部位の測定法
 - 第二項 脊椎の測定法
 - 第三項 『天聖銅人鍼灸図経彙攷』に見える「骨度折量尺」
 - 第四項 「濶狭界尺」及び「濶狭界寸」
 - 第四節 「骨度折量法尺式」の製作方法
 - 第一項 「量尺」「法尺」の製作方法
 - 第二項 「濶狭界尺」「濶狭界寸」の製作方法
 - 第五節 古今における度量衡と宗雲の身体観
 - 小結
- 第七章 『天聖銅人鍼灸図経彙攷』に見える山崎宗運による加筆について
 - 第一節 書誌について
 - 第二節 加筆の項目と内容
 - 第一項 「大椎攷」
 - 第二項 「脊椎法」
 - 第三項 「魚骨弁」
 - 第四項 「横寸攷」
 - 第五項 「背膂草度法」
 - 第六項 「八髎攷」
 - 第七項 「腹部量法攷」
 - 小結
- 第八章 江戸時代の銅人形製作に見る山崎宗運の経穴学
 - 第一節 銅人形の伝来と製作
 - 第二節 銅人形を用いた経穴学教育
 - 第三節 宗運による「銅人形」製作

第四節 「銅人形」の調査結果

第一項 身体構造の特徴

第二項 経穴位置と流注

小結

結論

本論文の序論、及び各編（各章・節）の内容は以下の通りである。

序論

江戸時代の医学を同時代の多種多様な思想・文化の展開の一例と捉え、後世派・古方派・漢蘭折衷派などの諸派が台頭したことを略述し、寛政三年（1791）に幕府直轄となった江戸医学館の医学教育が公教育的な性格をもった可能性を指摘する。そして、本論文において江戸医学館の鍼灸医学、特に経穴学を取り上げて論述するにあたり、その研究の方法と理由を明示する。研究方法としては、医学館における経穴学の学問の特徴を従来の鍼灸諸派の学問と比較することによって明確化しようとする。経穴学を取り上げる研究理由としては、鍼灸医学が内科的な漢方医学理論に依拠しながらも、治療技術は外科的側面を併せ持ち可視的であることから、漢方治療よりも当該期の身体観や諸流派の比較などを行う上で有効性があると述べる。

前編「医学諸派の台頭と医学教育」は、後編「江戸医学館設立期における経穴学」で具体的に展開される医学館の鍼灸医家による経穴学を考察するための前提をなす部分である。

前編は二章からなり、第一章「江戸時代医学諸派の台頭」では経穴学に即して17世紀から18世紀にかけての医学諸派の展開が説かれている。第二章「医学教育における諸問題」は18世紀後半の医学界における教育・学校をめぐる諸問題が説かれている。

後編「江戸医学館設立期における経穴学」では、医学館で鍼灸教育を担当した小坂元祐（第三章・第四章）と山崎宗運（第五章～第八章）を取り上げて、その著書を子細に検討して彼らの経穴学の特徴を明らかにしている。

前編「医学諸派の台頭と医学教育」

第一章「江戸時代医学諸派の台頭」の第一節「後世派」では、饗場東庵（1621～1673）の著作『医学授幼鈔』や、堀元厚（1686～1754）の著作『隧輪通攷』などを検討し、後世派の特徴として、内経医学古典（『素問』『靈樞』『十四経發揮』など）を重視すること、堀流の取穴法が高い水準に到達していたこと、その一方で閉鎖的な伝授形態（口伝の重視）にとどまっていたことを指摘する。第二節「古方派」では、後藤良山（1659～1733）が伝統的な鍼灸理論に批判的で、個体差に注視して「真穴」を取穴すべきであると主張したこと、この後藤良山の主張が高弟たちによって継承され、人体に注視し手指感覚を重視する経穴学が

普及したことを指摘する。第三節「漢蘭折衷派」では、蘭方医石川元混（?～1820）が解剖知識と経穴学を併用する例や、星野良悦（1754～1802）作製の骨模型が医学館で教材に使用されたことを挙げて、解剖などの西洋学術の刺激が伝統学術にもたらす変化を問題にする。

第二章「医学教育における諸問題」では、江戸医学館開設（1765年創設、1792年直轄化）前後の医学教育をとりまく状況について、二つの具体例を挙げて論ずる。第一節「望月三英による学校設立の試み」においては、幕府医官望月三英（1698～1769）の文集『又玄余草』などを検討して、望月が希少書籍の集積や学校設立によって優秀な医家を養成する希望を持っていたこと、その背景には京都における古方派の盛行と江戸の医界の衰微に対する危機意識があったことを述べる。第二節「津田玄仙による学校設立の試み」においては、上総の民間医津田玄仙（1737～1810）の例を挙げて、著書『勸学治体』『療治茶談』などから、当時の地方の民間における医療実態を踏まえて津田が初学者向けの教育組織の重要性を説いたこと、しかしながら津田の学校設立請願が失敗に終わったことを説く。

後編「江戸医学館設立期における経穴学」

第三章「小坂元祐の経穴学」では、第一節「元祐の出自」・第二節「生没年と多紀家への入門」においてその事蹟を紹介し、小坂元祐が出講した江戸医学館について第三節「躋寿館期の教育」・第四節「江戸医学館官立化以後」に分けて紹介して、幕府直轄化の前後において医学館の入学資格に変化があったことを指摘する（直轄化によって幕府医官に限定され、藩医・町医者が排除された）。その上で、第五節『『兪穴捷徑』と『経穴纂要』の比較検討』において、小坂元祐の二つの経穴学書を比較して、前著『兪穴捷徑』が『十四経發揮』に基きながらより簡便かつ正確な初学者向けの入門書として著述されたこと、取穴法についてより詳細な後年の『経穴纂要』は同じく入門書でありながら、対面に依らない自学自習のための書籍を志向したこと、つまりより広範な読者を想定した内容になっていることを明らかにしている。第六節「経穴の考証学的検討」では、小坂元祐の経穴学の特徴として、『十四経發揮』の経穴354穴を古典の記述に合わせて365穴に増補したこと、宮本流の経穴学の流れを汲む経脈運行（流注）を主張していること、経穴の位置の考証に解剖の知識が援用されていることなどを明らかにしている。第七節『『十四経絡發揮広要』について』では、新出の小坂元祐『十四経絡發揮広要』（写本）を検討して、同書が刊本の『兪穴捷徑』『経穴纂要』以上に広範な書物から引用していることを指摘し、小坂元祐の経穴学が『十四経發揮』を基盤に諸書を博渉し、また解剖知識を援用したものであったことを論じている。

第四章「宮本流経穴学について」は、小坂元祐がその流れを汲む水戸藩医宮本春仙とその一門（中島玄春・目黒道琢ら）の経穴学について論じ、宮本流が独自の経穴理論をともなう臨床性の高い学統であることを明らかにする。その上で、宮本流と小坂元祐の所説を比較検討して、細部においては小坂元祐が自らの属する学統の学説であっても古医書の説に合わないことを批判する例があることを紹介し、小坂元祐の学問の客観性・実証性に言及する。

第五章「山崎宗運の経歴」では、『寛政重修諸家譜』、亀田鵬斎撰「鳳来山崎先生墓碣銘」、多紀元簡撰「髯翁山崎先生墓表」、『よしの冊子』、曲亭馬琴『異聞雑考』などの諸書から引用して、幕府鍼科医官の山崎家が多紀家との縁戚関係があり、また山崎宗運が江戸の文人との幅広い交流を持つ人物であることを紹介している。

第六章「『釈骨』翻刻と「骨度折量法尺式」製作について」では、山崎宗運の経穴学に関する著述を検討して、その学問の特色を具体的に明らかにしている。宗運は清・乾隆45年（1780）刊『釈骨』を寛政10年（1798）に復刻しているが、その際に附録として人体各部位の経穴を取穴するための専用の定規「骨度折量法尺式」を製作したことを紹介し、その定規の製作方法と使用法を詳しく説明している。当時、古典の記述に基づかない取穴が横行し、また個体差のある人体に対して正確な取穴をどのように実行するかが問題になっていたことを指摘した上で、宗運製作にかかる「骨度折量法尺式」が『靈枢』骨度篇の記述に基づき、かつ取穴を簡易化するための器具であったこと、またこれを製作するために宗運が骨に関する詳細な名物考証を行っていることを明らかにしている。

第七章「『天聖銅人鍼灸図経彙攷』に見える山崎宗運による加筆について」では、北宋・王惟一撰『銅人腧穴鍼灸図経』に対する山崎宗運による注解『天聖銅人鍼灸図経彙攷』（台湾故宮博物院文献館所蔵、宗運自筆稿本）を考察対象として、その経穴学の特徴を論じている。特に『銅人腧穴鍼灸図経』原文には無く、宗運が附論として自説を附加している部分を取り出して、加筆された「大椎攷」「脊椎法」「魚骨弁」「横寸攷」「背腧草度法」「八膠攷」「腹部量法攷」から、経穴の身体部位を特定するためにランドマークとして大椎・脊椎・魚骨などの骨の名物考証が重要であることを指摘する。また宗運が古典に説かれた取穴法を具体的・実践的に理解するために従来の中野厚らの所説を参照するにとどまらず、最新の解剖学的知識を援用していることを明らかにしている。

第八章「江戸時代の銅人形製作に見る山崎宗運の経穴学」では、山崎宗運が製作したとされる東京国立博物館所蔵の銅人形を対象として調査し考察した結果が記されている。この銅人形は、北宋・王惟一撰『銅人腧穴鍼灸図経』の記述に基づいて、医学館における経穴教材として使用するために製作されたと考えられている。第二節「銅人形を用いた経穴学教育」では、江戸時代に後世派を中心に経穴学の入門教材として銅人形（張子製）が広く用いられていたことに触れ、第三節「宗運による「銅人形」製作」では明代『正統石刻銅人図経』以下の『銅人腧穴鍼灸図経』諸本について略述し、第四節「「銅人形」の調査結果」では東博所蔵銅人形の経穴位置を子細に測定し、その測定値を宗運製作にかかる「骨度折量法尺式」などと比較検討している。従来の中野派の銅人形と東京国立博物館所蔵の銅人形を比較し、経穴部位はともに『靈枢』骨度篇に依拠しているにもかかわらず、前者が経穴が集中する部位（頭部・腹部・四肢末端など）が大きく作られるのに対して、後者が実際の人体を模倣して作られており、両者の形態は似ていないと指摘する。そして、山崎宗運が医学古典の記述を尊重しながら、諸説を折衷し、より実証性の高い経穴学を追求したと結論している。

以上、八章の行論を踏まえ、結論においては、江戸時代における医学諸派と、医学公教育形成期に当たる小坂元祐・山崎宗運の経穴学を、それぞれ伝授方式、考証手法、学問姿勢の視点から比較している。伝授方式としては、従来の医学諸派に見られる閉鎖的・主観的なものから小坂元祐・山崎宗運のそれが公開性を持ち客観的なものになっていったとする。考証手法としては、小坂元祐・山崎宗運の名物考証が、従来のような古典文献学的方法だけでなく、解剖医学の知識を援用したものに变化したとする。学問姿勢としては、後世方系の古典医学理論に依拠しつつ、解剖知識に基づく人体構造理解を併用し、漢蘭折衷の姿勢が看取されるとする。そしてこれら学問における客観性・実証性・折衷性を背後から支えたものが、官立医学校における医学公教育の形成であったと結論づけている。

最後に今後の課題として、第一に「医学公教育形成期の政治的背景・社会情勢の検証」、第二に「医学館官立化過程のより精細な調査」、第三に「医学館の諸藩への影響」を挙げている。

論文審査の結果の要旨

江戸時代における医学の展開が当該期のわが国独自の発展を遂げた学術文化の典型であることは周知の通りであり、当該期医学の歴史研究の蓄積は漢方・鍼灸・蘭方や医学各科にわたって極めて多い。本論文は、鍼灸医学が内科的な漢方医学理論に依拠する一方で、治療技術の面では外科的側面を併せ持つものであることに着目し、鍼灸医学の中でもとりわけ可視的な性格をもつ経穴学（ツボの位置や経脈に関する学知）を考察対象とした論考である。経穴学の視点から江戸時代医学の展開を展望した点に本論文の独自性と特色がある。

本論文のもう一つの特色は、江戸幕府の直轄医学校である江戸医学館に着目し、医学館で鍼灸医学の教育研究に従事した小坂元祐と山崎宗運という二人の医家について、その著作を詳細に調査・検討し、漢方と蘭方が共存しはじめた1800年前後の我が国の医学界の状況を具体的に明らかにした点にある。江戸時代後期における伝統医学と解剖知識に代表される西洋医学の関係については、わが国の身体観の変化とも関わる重要な問題であり、著者の経穴学に関する試みはこの問題の考究に有効である。

江戸時代医家とその経穴学研究を考察対象とした本論文は、基本的に日本漢学分野、あるいは日本医学史分野の研究であるが、中国医学古典に通じた江戸時代医家たちの研究成果や問題意識を考察するには、その著者にも同等の中国医学古典知識が前提となる。その意味において、本論文は中国学専攻の博士論文として十分な資格を有するものである。

江戸前期における後世派、中期における古方派の展開を経穴学に即して略述した第一章は、小坂元祐や山崎宗運ら江戸後期の学者たちが直面し克服しようとした問題の所在を明らかにする役割を担い、論旨の展開の上でも有意義である。

三章以下に説かれている小坂元祐と山崎宗運に関して、従来言及されてきた刊本類に止まらず、これまで殆ど扱われてこなかった希少な写本や新出資料などまで博捜し立論して

いる点も評価できる。具体的な資料の検討を通して、明らかになった興味深い事実は数多い。経穴位置を同定する取穴法において、人体のランドマークの役割を果たす骨の名物考証が重要であり、その同定のために文献学的方法だけでなく、最新の解剖知識を援用し、特製の定規を用いた取穴法を工夫するなど、さまざまな取り組みがあったことなどである。経穴に関する詳細な追求は、鍼灸治療の臨床家でもある著者ならではのものであり、この点に本論文の最も大きな価値がある。

その一方で、本論文にはいくつかの不十分な点も残る。公教育形成と経穴学の関係性がより明瞭になるよう、論点を整理して、公教育と経穴学を結びつけるより大きな文脈を工夫するか、或いは公教育形成をより明確に打ち出すために制度史的な論述を増やすか、他日公刊する際には何らかの工夫を求めたい。また、医学諸派それぞれの人物と主要学説について、人物相関図や用語解説のようなものがあると理解しやすい。主観的・客観的・考証学など頻出語の定義があったほうがよい。

以上のような問題点があるものの、本論文は全体的に見て、先行研究を十分に踏まえた上で新知見を提示しており、論証に必要な情報が丹念に収集されている。本論文に対する評価の一例として、山崎宗運の『釈骨』と「骨度折量法尺式」に関する論文（本論文第六章）が、全国レベルの学会誌（『日本医史学雑誌』）に掲載され当該学会の受賞対象となったことも申し添えておく。

よって、審査委員一同は一致して、本論文が「博士（文学）」（甲）の学位を授与するに値するものであると認定した。

博士學位論文要旨集

内容の要旨および審査の結果の要旨

第 23 集

2020（令和2）年3月16日

発行 二松学舎大学大学院

編集 二松学舎大学 教学事務部 教務課

〒102-8336 東京都千代田区三番町6番地16

電話 03（3261）7406